小論文	十四時三〇分～ 十六時〇〇分（一時間三〇分）

問題文は、二枚目以降に記載（ただし、試験開始の合図があるまで見ないこと。）

注意事項

■試験開始前の注意

一. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙の二枚目以降を見ないこと。
　また、解答用紙にも手を触れないこと。
二. 受験票は、監督者から見えるよう机上札の横に置くこと。
　受験票を忘れた場合は、受付で仮受験票の発行を受けること。
三. 筆記用具以外の筆箱・ペンケースなど、私物はすべてかばんの中に片付けること。
四. 試験用具の貸し出しは一切いたしません。
五. 携帯電話を使用することは、時計・アラーム等の用途を問わず、禁止します。
　必ず電源を切り、かばんの中にしまってください。

■試験開始後の注意

一. 試験開始後、問題用紙および解答用紙類の印刷不鮮明な箇所、落丁、乱丁、汚れ、不備などに気がついたら、手を挙げて監督者に知らせること。
二. 解答用紙裏面の所定欄に受験番号・氏名を記入すること。
三. 試験開始後は、試験終了時刻まで途中退室できません（トイレ等を除く）。
四. 質問がある場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。質問は試験終了一五分前まで受け付けます。それ以降は受け付けません。
五. 試験中にお手洗いを希望する場合は、手を挙げて監督者に申し出ること。
　その際は、他の受験生の受験を阻害しないように注意すること。

■試験終了時の注意

一. 試験終了後は、問題用紙のみ持ち帰ってかまいません。解答用紙を提出せずに持ち帰った場合は、試験放棄とみなします。
二. 試験終了後は、受験票その他の忘れ物に注意すること。

用紙		
	（問題用紙）本冊子（本紙を含む）	五枚
	（解答用紙）原稿用紙	一枚
	（下書用紙）Ａ４白紙	一枚

使用可能用具：筆記用具（鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り）

【問い】

以下は『シルクロード世界史』（森安孝夫著、講談社、二〇二〇年）の一部分です。この文章を読んだうえで、次の問いに答えなさい。

(一) この文章を、四〇〇字以内で要約しなさい。

(二) この文章で述べられた歴史学の役割や歴史という教養をもつ必要性についての考え方をふまえ、あなた自身は歴史を知ることや学ぶことに対しどのように考えるか。四〇〇字以内で論述しなさい。

解答用紙は、縦書きで使用すること。

【課題文】

歴史を知ることは、腹の足しにはならないが、心の足しにはなる。

四大文明の時代から、壁画や装身具を彩る群青（ぐんじょう）（ウルトラマリン）色を出すために使われた顔料は高価なラピスラズリ（金精／青金石）であったが、その色を人工的に作り出すことに初めて成功したのは、一九世紀フランスのジャン＝バチスト＝ギメであった。彼はパリの理工科大学で化学を学んだ後、実業家になり、ウルトラマリンの四〇〇〇分の一の安価な人造顔料「ブルー＝ギメ」を発明して、巨万の富を得た。

その財産と事業を受け継いだのが、息子のエミール＝ギメである。彼こそが、現在のフランス国立ギメ東洋美術館（パリ）の前身となったギメ宗教博物館（リヨン）の創設者である。西欧より遥かに古くから文明を築いていた国々に興味を持って世界中を旅行し、とりわけエジプト文明に心酔し、また明治時代の日本も訪れた彼は次のように述べている。

自分は実業家の息子であり、工場長であったことで、労働者たちとの接触は日常のことであった。私は常に彼らには心の健全さや、体の健康を保つべく心を砕いてきた。学校や講座、音楽クラブ、共済組合などを創設した。ところが哲学の道や宗教の創始者たちが、そのような考えをもっていたことに気がついた。老子、孔子、釈迦牟尼、ゾロアスター、モーゼ、プラトン、イエス、マホメットらが、それぞれその時代に社会問題の解決策を提示していたのである。（中略）

宗教博物館を私が創設したのも、労働者に幸福になってもらいたかったからである。

以上は、エミール＝ギメの日本旅行記の一部に当たる『明治日本散策　東京・日光』の巻末解説よりの引用である。解説を担当した尾本圭子（元ギメ美術館職員）は、エミール＝ギメの工場長就任五十周年記念祝賀会で挨拶した従業員が、「すべての雇用主がギメのようであったなら、社会問題は起こらなかったであろう」と言ったことを紹介し、音楽が労働者に教養や楽しみを与えるとなれば音楽ホールを作り、国家に先立って共済組合や年金の制度を設置し、教育を重視して学校や講座を開設したのは、マルクスやエンゲルスが現れた時代の経営者として彼なりの解決策を探っていた結果であろう、と指摘している。

ところで最近の我が国では、すぐに役立つような理科系の学問が重視され、文科系の学問が軽視され

る傾向にある。さらに二〇世紀の最後の四半世紀には、歴史学の役割は文化人類学や社会学や民俗学に取って代わられつつある、という風潮さえ生まれていた。二一世紀の今では、そんなことを言う者は影を潜めたと思うが、歴史教育の現場では、歴史は日本史だけでいいとか、世界史をやるにしても近現代史だけでいいとする風潮が強まっているのは一体どうしたことだろうか。

現代世界で起きているあらゆる事象を説明しようとする時、歴史学が政治学・経済学・文化人類学・社会学・民俗学などと勝負できるのは、時間と空間を自由に駆け巡りつつ、比べる力と結びつける力を発揮して論理的に因果関係を見出すことができるところにある。歴史学者の間でさえ近現代を重点的にやればいいなどと視野の狭いことを言う者がいるから、文化人類学・社会学などの社会科学に駄目出しされたり、地域研究に代表される「アメリカ型非歴史主義」に負けてしまうのである。歴史学の真髄は時間であることを忘れてはいけない。人類の「知の地平」を縦軸（時間軸）で考察する能力を涵養（かんよう）するのは、歴史学だけなのである。

現代に存在するあらゆるモノ（物質世界も精神世界もひっくるめて）はすべて歴史的所産である。だから現在はすべて過去で説明できる。個々人の衣食住のスタイル、言語、思考様式、美意識、道徳観、宗教などあらゆる人間活動の基礎になるものはすべて、幼児から成長する過程で周囲から与えられ取捨選択してきたものである。もちろん個人を取り囲む言語状況、社会・経済制度、国家体制などもまたすべて歴史的所産である。文化とは言語や宗教も含め社会集団が共有している知識の総体であるが、国家間や民族間の文化の違いを産み出した歴史の違いについて、相互理解がなければ平和共存はありえない。その違いは、古代史から学ばなければ分からないのである。古代史からやらなければ、なぜ日本が仏教国になったのかさえ分かるまい。

本当にグローバルな世界史が成立する必要条件は、世界のあらゆる地域や国家の歴史を一つの時間軸で並べ直す基準の存在である。その基準は今やキリスト紀年（西暦）でしかありえないが、古代史を学ばなければ、キリストが元々は西洋になど関係なく、ローマ帝国が三〇〇年以上もキリスト教を迫害してきたことも知らないままであろう。

世界史を古代から教えるのは大変だからという理由で、近現代史だけにしてしまえば、どうなるか。今でも教育の場やジャーナリズムで語られる世界史には西洋中心史観が根強くあるが、近現代史だけになればその傾向はいっそう強まるどころか、世界の先進文明はすべてヨーロッパに由来するのだというとんでもない思い込みを、人々に植え付けてしまうことになる。いまだに日本人は西洋ブランドが大好きで、アジアを蔑視する傾向があるし、大学の教員配置もことごとく西洋学に偏っている。

ひたすら文明開化を目指し欧米流に倣（なら）おうとした明治日本と異なり、第二次世界大戦後の日本では多くの歴史学者の努力もあって、近代以前の長大な歴史においてはアジアが世界の中心であったことが論証され、教科書にもそれが反映された。約一万一〇〇〇年前の農業革命を経た後の人類の文明は、メソポタミア文明・エジプト文明・インダス文明・中国古代文明のいわゆる四大文明で大きく花開き、現代にまで続く世界的宗教は西アジア・インド・中国で生まれ、一三世紀のモンゴル帝国の出現によってはじめて真の世界史が誕生したことは、ほぼ常識になりつつある。それなのに今また、世界史教育を近現代史に限定してしまえば、西洋中心史観が復活することは目に見えている。

かつて歴史を学ぶ意義はと問われた時には、「過去に学んで、現代に生かし、明るい未来を切り拓くも

の」という紋切り型の回答が用意されていたものであるが、正直なところ未来を予測することなどできない。予測したところで、たいていは外れるのである。我々が、ある程度正確に知ることができるのは、過去の出来事だけなのである。長期的に過去から眺めなければ、国際情勢はもとより、国内で生起しているさまざまな現象やものごとの現状分析さえ不可能なのである。

歴史学に未来を予測する能力はないが、国家や企業の政策や方針にとっても、個人の人生設計にとっても「ガイド」にはなり得る。事実認識なくして、新しい判断は生まれない。個人、家族・親族などの血縁、会社・学校などの共同体、市町村などの地域社会、民族・国家・文化圏の由来を知る。その上に立って、世界の中の自分のアイデンティティを考察し、足元を見つめ、これから生きていく上に必要な判断の基礎を獲得することが大事なのである。自分は誰かということは、自分の先祖は誰か（ルーツはどこか）ということであり、アイデンティティの根幹は歴史である。

人類の歴史がまさに戦争の歴史、人殺しと領土の奪い合いと差別と搾取の歴史であったことは、誰の目にも明らかである。しかし、二〇世紀末までの戦後五〇年間の日本人は、小学校・中学校では無償で教育が受けられ、軍隊に入って人殺しを無理強いされることもなく、無法に家屋を破壊されることもなく、富裕層でなくてもそれなりに美味しいものが食べられ、綺麗な衣服を着て娯楽にも時間を割けるという人類史上で最も幸福な時代を経験した。それはひとえに徴兵制も戦争もなかったからである。

一方、たとえ民主主義国家であっても、特に貧困層の若者たちは志願して下級兵士となり、結果的に戦争にかり出され、人殺しを余儀なくされた場合も少なくない。アメリカ合衆国がいい例である。二〇世紀末までの戦後五〇年の日本人が、日本史上どころか世界史上で最も幸福だったことに気付いている日本人は、いったいどれだけいるのだろうか。

二一世紀に入り、国内では経済格差が拡大し、いじめやヘイトスピーチが横行し、海外ではテロと戦争が頻発するなど、状況は次第に悪化しているが、戦争だけは絶対に避けなければいけない。「憎悪」は「欲望」に劣らない強さをもった人間の本能であるが、戦争をあおる「憎悪」や「欲望」をコントロールするのが教育であり教養である。対外的な戦争や対内的な権力闘争で、大量の殺人を指揮した者が英雄になるという現象を皮肉って、「人間一人を殺せば殺人罪だが、万人を殺せば英雄」という言葉は、残念ながら現代でも生きており、いくつもの国家の権力者は殺人教唆の罪に問われてしかるべきであるのに、そうはなっていない。

人間世界には実に多くの格差や差別が存在する。人種差別、民族差別、部落差別、男女差別、実学と虚学という差別、学歴による就職差別など、あらゆる差別は今後も決してなくならないだろう。しかしながら差別というのはほとんどが「勝てば官軍」の論理の勝利者側が自己の都合の良いように作り出した人為的なものであり、歴史的に突き詰めていけば、そこに学問的根拠はないことが分かるのである。歴史を学ぶ意義の一つは、差別に学問的根拠がないことを知って、差別される側が強くなれることである。

私が長らく大学で教えていて一番驚いたのは、ある大学で講義を終えた後に、学生から「国立大学の教授が権力批判をしていいんですか」と問われた時である。あまりのことに唖然として、答える気力さえ生まれなかった。国公立・私立を問わず、歴史学に携わる教員の大きな使命の一つは権力の監視であり、そのために学生に批判精神を植え付けることである。それが許されない国は、もはや民主主義国家

ではない。

国家権力側からすれば、「知の温床」である最高学府は、時に政権批判の温床となる危険をはらんでいるわけで、必要悪とも言えるのである。歴史学者は政治的にはできるだけ中立で、脱イデオロギーの立場であるよう求められるが、現代の民主主義の根幹が崩されようとするならば、それには当然ながら抵抗しなければならない。今や権力者の横暴を抑えられるのは、選挙権のある大衆の世論だけである。歴史家は「知恵ある」大衆の育成をめざす努力をしてもらいたい。

国家体制の違いにかかわらず、二一世紀の地球規模の課題は環境問題と人口問題である。歴史的に見れば戦争が時々の人口爆発を抑えてきたという恐るべき事実を踏まえつつも、戦争こそは最大の環境破壊であると認識して、今後は決して戦争を起こさないように、あらゆる軍事的・経済的・政治的軋轢を国際社会の教養あるメンバーが互いに知恵を出し合って解決する方向に進んでいって欲しい。知恵は何もないところからは生まれず、教養という蓄えがあってはじめて生み出せるのである。歴史という教養を持たない政治家など全く不要である。